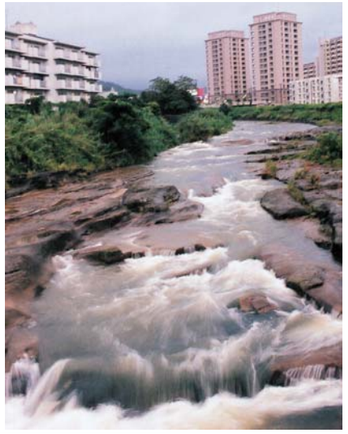
特集

川を守り川に親しむ
相浦川の自然と環境

多くの生き物をはぐくみ、豊かな自然環境をつくり出す川は、水道の水源となるなどわたしたちの生活にも欠くことができないものです。今回は、市内で一番長い相浦川の自然を観察するとともに、水の汚れ具合などを調べる2つの環境イベントを取材しました。

◀相浦川の源流・郷美谷池（里美町）



◀中流（泉福寺団地付近）

◀河口（陸上自衛隊相浦駐屯地付近）

川と共に暮らす

水はすべての生き物の母とも言えます。水は森や池に蓄えられ、川となって海へと注ぎます。

森の落ち葉はいろいろな生物によって分解され、栄養分になって海に運ばれ、プランクトンを育てます。プランクトンを小魚が食べ、小魚を大型魚が食べる「食物連鎖」という海の生態系にも、川は深くかかわっています。川の生態系が健全だと川が水をきれいにする自浄作用が働き、安全な飲料水を得ることができます。

一方で、川は時として洪水などの災害をもたらすため、利水・治水を目的とする河川法に基づき、最近まで、主に護岸工事などの整備に力が注がれ、川にすむ生物が減りました。

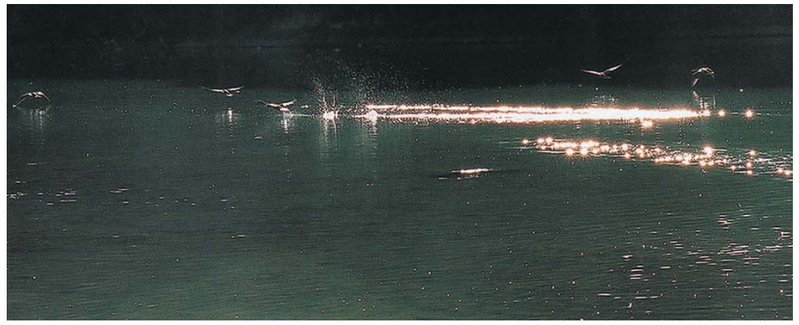
そのため、生物を守り人が川に親しむことができるよう、平成9年には河川法が改正され、その目的に河川環境の整備と保全が加えられました。

相浦川の様子

相浦川の長さは20・1キロで、県内3番目です。潜木町・栗の木溜池と里美町・郷美谷池を源流として、柚木、大野、中里皆瀬、相浦の各地区を経て、河口から九十九島の海へと注いでいます。

流域面積が広く、13の支流が流れ込み、相当、川谷、転石、菰田などの水源池があり、水道水の多くを賄っています。

川谷水源池より上流は、水がきれいで、浅いところは水遊びができます。ヨシノボリなどの魚類やサワガニなどがいて、水生昆虫の幼虫がとても多いところです。中流域には住宅などが多く、生活排水が直接、流れ込むところもありますが、カワムツなどの魚類や、イシマキガイなどがいます。相浦川下流域では、多くの鳥類が観察できます。特に冬はカモ類がたくさん見られます。



（写真左上）　水面を飛び立つマガモ
（写真右上）　和田津美神社境内のダイサギとマガモ
（写真左下）　河原に茂る葦

冬　下流域の自然を観察

昨年の12月16日、川下町と相浦町にかかる大和橋のたもとから、相浦川沿いの歩道を河口へ向かって歩きました。松浦鉄道の高架下をくぐって進んで行くと、河原でマガモの群れが遊んでいました。

川の中の小さな三角州の先に、和田津美神社の鳥居が見えました。その参道にはアオサギが一羽、羽を休めていました。

参道の左手は小さな干潟になっていて、チゴガニ、フトヘナタリ、トビハゼなどの水生生物がすんでいます。

右手の川岸には、葦の穂が風にそよぎ、日の光を受けて輝いています。葦は川の勢いを弱め、川の流れが変化して、魚貝類がすみやすくなります。

川面では、マガモなど野鳥の群れがアオノリをついばんでいます。ここは冬鳥のえさ場となっており、まさに野鳥の楽園です。近づいていくと、マガモがその気配を感じて、川面に白い水飛沫を引きながら、一斉に飛び立ちました。

鳥居が立つ境内に入ると、ダイサギとマガモが仲良く並んでいました。

境内を一巡りして、上流の方を振り返ると、冬の青空に愛宕山がそびえ、大空をアオサギがゆったりと飛んで行きました。

大和橋まで戻り、市役所相浦支所付近を望みました。相浦支所の下流域には、真水と海水の境となる汽水域にしか生息しないタケノコカワニナがいます。タケノコカワニナは巻き貝で淡水のカワニナによく似ていますが、絶滅危惧種です。

大和橋を後にして、河口まで行きました。近くの岩場では釣り人が糸を垂れていました。陸上自衛隊相浦駐屯地の堤防の前には、干潟が広がります。ここは、佐々川と並んでハマグリがよく採れるところですが、近年、採取され過ぎて数が少なくなっています。

干潟は川の汚れを取り除き、きれいな水を海に流す役目をしています。